2019年Aセメスター報告書

澁谷宗之介

　コロナウイルスが中国で爆発的に蔓延してから1ヶ月以上経った 2 月末、一時帰国してからも1ヶ月弱経ちようやく落ち着いてきたので報告書を書くこととした。今の中国は完全に都市間の移動も制限され、ちょうど春節も被ったことから、各自自宅での待機がほとんど強制的に実行されている。その成果もあり現在感染者数の増加もかなり抑えられ、現在は毎日2500人ほど完治している。一方日本といえば、ようやく国民全体もその余波が日本に来たことに気づき始め、政府は二転三転する対応でその危機対応におけるぎこちなさを露わにしている。ここにもやはり中国の特色を感じざるを得ない。1月は期末テストが終わってからすぐに香港、タイ、ラオスへと旅行をしていたためコロナウイルスアウトブレイクのタイミングでは中国内部の状況や切迫感は見ることができなかった。しかしラオスやタイでの中国人ツアー客の多さや、刻々と更新される最新の感染状況、次々と封鎖される交通網の情報を見るとやはり自分の中でその焦燥感は中国国外においてもますます大きなものへとなっていった。1月下旬時点ラオスでマスクをしながら旅をする中国の若者一団も見かけたほどである。その後一

時帰国のために昆明を目指してラオスからバスで出発し、中国に入った後の徹底した消毒や体温測定、人がいない地下鉄など明らかに異常と言わざるを得ない事態であったことを、身をもって体験した。そうかと思えば成田空港到着とともに日本における緊張感のなさもひしひしと感じた。

　中国的特色ある社会、留学前からよく聞いていた言葉だ。留学前からも何度も中国を訪れ、色々な場所も旅行していた。その都度中国への理解が深まっていったと勝手に思い込んでいたが、長期滞在と短期の旅行ではやはり得るものも、視点も変わってくるものだと思い知らされた。

　留学開始とともに煩雑な手続きが待ち構えていた。キャンパスアジア事務所の受け入れ先である元培学院から到着後の流れに関してほとんど皆無といっていいほど情報が送られてこなかったのだ。とはいえこれは共に派遣されてきた東大生と共に情報共有をして何とか片付けた。9 月はほとんど手続きや履修登録で忙しく過ごしたせいで記憶があまりない。

ラオス中国国境間イミグレーションラオス側、係員含め大半の人がすでにマスクをしていた（１月２７日)。それを除けば至って普通の業務が行われているようだった。

ラオス中国国境間イミグレーション中国側、入国時に直近の滞在先や国内での訪問先、滞在先、連絡先を記入させられた。ここでは切羽詰まった雰囲気は一切なく、体温も計られなかった。

中国側の国境沿いの街、磨憨。コロナウイルスに加えて春節もあってか、写真のようにほとんどの店や銀行が閉まっていた。

授業

授業に関しては、当初から中国語で開講されているもののみを履修する予定であった。最終的に世界社会主義概論、中華人民共和国対外関係、中ソ関係及びその中国社会発展への影響といった科目を履修した。地域研究アジア科として自身の研究テーマを中国社会に関するものに絞ろうという目的であった。当初は中国語のみで2、3時間も話し続ける授業に慣れず、いずれも大人数授業であったことからあまり集中できず、録音などで補った。とはいえ結局聞かずじまいで終わった。北京大学に限った話ではないのかもしれないが、各教室に東京大学と大きく異なる特徴が一つあった。監視カメラだ。一つや二つだけでは済まず、天井の一つの隅ごとに二つ三つあったりするのだ。一体何のためにここまで監

視する必要があるのかはわからないが、いわゆる中国的特色というやつだろうか。しかしもっと不思議であったのは大半の学生が気にしている素振りを一切見せないことであった。新入生が多い授業もあったが、中には気付いていないものもいるようであった。事実、Language Partner にこのことを話すと驚いていたようだった。むしろこのことは彼らがいかに監視カメラに慣れきっているかもしれないであろうことを示しているのかもしれない。防犯目的で路上に監視カメラがあるのは自然なことで、日本にももちろん多く設置されているが、教室内でここまでする理由は正直解せなかった。とはいえ路上にも大量の監視カメラがあり、最近では信号無視をした人の顔を瞬時に認識し、身分証番号とともに顔を晒す機能がついたモニターも登場したことからこうした社会が当たり前になりつつあるのであろうか。

授業は興味深い内容が多かった。一つ気づいた点として教師が中国のことに触れるとき必ず我们中国といった風に“我々の祖国”といったニュアンスで話しているのだ。これは日本で授業を受けている際にはあまり感じたことがなかった点かもしれない（あるいは気づかなかっただけか)。その他、授業や教師にもよるが偉大なる中華民族の復興、偉大な改革開放の成功といった“成功”“偉大”

といったキーワードで中国の近年の発展ぶりを称賛するような授業もあった。このような授業は世界社会主義概論や毛沢東概論といったような必修となっているようである。とはいえ概ね学生からの人気は無く、少なくとも自分が受けた社会主義概論に至っては授業中に教室を見渡すだけで9割ほどの学生が教師の話を聞かずに好きなことをしていることがわかる。個人的には社会主義の発展とその歴史を知るために受けただけなのでそれ以上でもそれ以下でもなかった。

　また、これだけ監視カメラなんかあっては教師も政治的に敏感な話題はできないものかと思っていたが、必ずしもそうではなかった。ある授業では社会主義の歴史においてどの社会主義国家も経済的に遅れている初期は社会主義的政策が効果をもたらすが、時間の経過と共に腐敗や民主化要求運動といった困難に直面し、それにいかに中ソ二大国が対応したかといった比較をした。その時、当然現在も共産党による独裁体制が布かれている中華人民共和国では禁句となっているはずの30年ちょっと前のある民主化要求の事件が平然とパワーポイントに映し出されていた。これには正直驚いた。教師はそのことについて明確には言及はしなかったが、中国でその事件を暗示する二つの数字はスライドにでかでかと載っていた。大学への締め付けも昨今強まっていると聞いていたばかりだ

ったので必ずしもそうではなく、自由な校風を保っている北京大学というものをここで感じた。

中国語

自分の中国語の水準は留学前は可もなく不可もなく、どちらかといえば不可に近い方だったかもしれない。中国に何回か来ていたことはあったものの、基本的にこちらから発話することはできても返答を聞き取れないか、聞き直すことが多かったように思う。留学初期もそうであった。前述の通り大人数授業のみ取っていたため授業ではなかなか友達ができず、中国語の練習もどのようにするか考えあぐねていた。サークルは柔道の経験を生かして柔術サークルに入った。当初は馴染めずにいたが段々と仲良くしてくれる友達が増え、一緒に美容院に行ったりした。半年間それなりに過ごしていたためそれなりに友達ができ、以前に知り合っていた人民大学の友達を誘って旅行に行ったりもした。日中交流協会という団体が Language Partner をマッチングする手筈を整えてくれたため、朝鮮族自治区の北京大学生と知り合い、毎週時間を決めて中国を用いて日本語と朝鮮語の言語交換をした。とはいえ朝鮮語に対するモチベーションは高くなかったので数回で諦めてしまった。それよりも朝鮮族の中国における立ち位置

や文化を知ることができた方が大きな成果であった。後には実際に東北の延辺朝鮮族自治州にも訪れ、その本格的な朝鮮料理に舌鼓を打った。そんなこんなで半年間過ごしているうちに少なくとも口語とリスニングに関してはかなり上達したように思う。授業のスピードにもついていけるようになり、グループ課題ではそれなりに議論もできるようになった。教科書やスライドをひたすら読んでいたので単語力も自然と身についた。あくまで口語に限っての話かもしれないが、ひたすら話して聞き、読むことが短期的に中国語力を上げる手立てであるように思う。

延吉西駅、駅名がハングルと中国語で併記されている。/高速鉄道の駅にあったプロパガンダ。各民族の調和が謳われている。

朝鮮料理のお店、チマチョゴリと毛沢東が出迎えてくれる。

コンビニはほとんど全てと言っていいほど韓国からの輸入品であった。

学校生活

　宿舎は中关新园という留学生向けの宿舎、毎日数時間おきに掃除の人が廊下やトイレを掃除してくれるのでとても清潔に保たれている。二人部屋で、ルームメイトは幸か不幸か東大でのクラスメートであった。ルームメイトで新しく留学生の友達を作ることもできたかもしれないが、自分としては日本語でも議論できる相手であったことが幸いであったように思う。宿舎で友人ができるかといえばそうとは限らないからだ。留学生向けにイベントなんかが開かれること

もあるが、自分は一回も参加しなかった（というより大抵事後に知る）。

宿舎はキャンパスから大通りを一本挟み、歩道橋を渡るとすぐに着く。とはいえ歩道橋を渡るのも段々と面倒になってくる。食堂は宿舎側に一つ、キャンパス内にいくつか美味しい食堂がある。個人的には宿舎側の食堂が一番美味しかった。授業がない日はわざわざキャンパス側に行こうと思わないので宿舎側で済ませるが、大抵同じようなものばかり食べるので段々と飽きてくる。そこで外卖と呼ばれる出前で注文し始めるが、これも段々と飽きてくる。ちなみに大半の人が同じ道を辿るのでこれを読んでいる人も覚悟をした方がいい。自分はついに栄養バランスが崩れてしまい、旅行中に高熱を出したので注意が必要である。それからは栄養バランスを気にして自炊を始めた。日系スーパーもあるし、ネットショッピングでありとあらゆるものが買える。日本食の調味料も全て揃う。もちろん留学で現地の食事を挑戦してもらいたいのはまちまちだが、北京大学の周りには一人で気軽に入れるような小さいお店があまりない、というのが印象である。中国人の友達に連れて行ってもらうか、あるいは旅行先で色々食べてみるのがいいかもしれない。

授業と自炊以外の時間は何をしているかというと、自習をしたり、友達を会っ

たり、サークルに行ったりしていた。上述のように、柔術のサークルで柔道の経験を生かしてサークル員に技術を教えたりしている。たまに北京大学内や北京市内を散歩することもある。盧溝橋事件の博物館や、中国人民革命軍事博物館などに行ったりした。北京市内の故宮や円明園、頤和園など世界遺産は、過去 3 度の北京訪問で全て行っていたので北京に対してあまり新鮮感はなかった。

宿舎の様子。2 人部屋にしてはかなり広い。テレビもついているが一回も使ったことはない。

旅行

ここまでの写真でわかるかもしれないが、旅行が好きなのでいくつか気になっていた場所に旅行した。しかし本来であれば冬休みにもまだ未踏の内陸西部を踏破する予定であったのだがご存知の通りコロナウイルスで全部パーになっ

てしまった。また機会があれば挑戦したい。また留学受け入れ先の元培学院が毎学期留学生向けフィールドトリップを用意してくれていて、無料で参加できるほか、留学生本科生の友人を作るチャンスである。実際にこれでかなり友人が増えた。2019 年秋学期は上海へのフィールドトリップであった。上海自体は 2 回目だった。康师傅という中国一のシェアを誇るインスタントラーメン会社にお邪魔し、その会社がどのように発展し、自社製品の安全性向上やどのような社会貢献をしてきたかお話を伺った。早稲田など日本の大学とも提携して商品開発に取り組んでいるらしい。今や経済的には圧倒的な中国も、日本との協力は不可欠である。日本も中国経済の牽引力なくしてこれからはやっていけないだろう。

康師傅控股有限公司へお邪魔。経営理念や商品開発について学んだ。

　また、上海博物館へ行って中国古代から近代までの様々な芸術品骨董品の膨大さに魅了された。文化大革命や内戦で多くの貴重な品々が失われたと聞いていたが、やはり広大な大陸、掘れば掘るほど出てくるのか尋常ではない所蔵品数

であった。

上海博物館、美しい調度品や翡翠で出来た古代の装飾品など多くの展示物が楽しめる。

　他にも中国共産党が結成された中国共産党第一次全国代表大会会址や北京大学の自由な校風造りに貢献した蔡元培の故居を視察したりした。

　元培学院が準備してくれたこのフィールドトリップの他にも個人で週末や国慶節、冬休みなど連休を利用して、武漢、南京、山東省、ハルビン、長春、朝鮮族自治州、天津、香港、タイ、ライスなどに旅行をした。本来であればもっと多くの地へ行く予定であったが、コロナウイルスの件もある種の体験として記憶に留めておきたい。これ以上だらだらと書く訳にもいかないので以上とする。